七大別の解

一、顳顬葉（側隔部）我慾、自衛の機關がある。
二、後頂葉（後頂部）家庭愛情の機關がある。
三、頂葉（後頂部）自信、大望の機關がある。
四、前頂葉下部（前額下部）觀察、記憶、表彰機關がある。
五、前頂葉上部（上額部）推理鑒識の機關がある。
六、頂葉上頂側部、美意識の感情機關がある。
七、前頂葉頂部、道德、宗教機關がある。

相手

第十四圖

（本文「手相」篇參照）

自序

天に天文あり、地に地理あり、而して人に相あるは之天理の顯現なり。則ち天曇れば風雨の變を生じ、地溫異なれば變妖災禍を生ずる所以なり。人の相貌に於てもその血色に變異あらんか、必ずやそれに相應せる禍福を招來するものと其の類を斷ずることを得べし。

斯の如く天地の間に於ける一切の有情無情は元より、死物の器に至るまで一として相に關はらざるものなし。然れども相を觀ずるは一朝一夕の業に非ず、その神相に悟入せざれば自ら掌中の玉石を投ずるに等しく、その術を體すること覺束なしと斷じて大過なし。

夫れ本來相法を修むるは本身を治むるにあり。身治まれば家整ひ、家整へば國治まるの理なり。之を他に及ぼしては性格の善惡正邪、及びその運勢上に生滅する吉凶禍福壽夭を斷じ、禍を轉じて吉となし、難を未然に防止するの理を指揮軍配するの道なり。

觀相學の行はるゝや久し。印度にては淨飯王の御代に、支那にては黃帝の治世に遡り、

我國に於ては上宮太子が親しく崇峻天皇を相し給ひ、又鈴鹿の老翁が畏くも天武天皇を相せられ給ひしに權輿せり。爾來大織冠鎌足、三善清行、伴別當兼平、相少納言維長等相次ぐ水鏡の達人たりし明證あり。其の學術たるや醫家の先務にして、神聖工巧四知の法も、觀形察色の法も、悉く之相法と謂ふべし。往古より診斷に上達せる醫家は、聲を聞き形を望みて、速くも病の存亡を察知せりと云ふ。今日より之を見るもその深甚微妙なること驚嘆措く能はざるものあり。

泰西にては遠く古代希臘のソフイヤがソクラテスを相せし事實史傳に見ゆ。且つアリストートルの著「内臓と顔面」及びヒポクラテスの「四液說」は斯學の最古文献として早くも世に出でたるものなり。亦羅馬の中世期以降觀相の行はれたるは古書に屢々散見する所なるも、一の體系化されたる科學として確立せられたるは十八世紀の中葉、瑞西のドクトル・ラバーテルの出現を以て嚆矢となす。而して玆に興味深きは古今東西その轍を同じうして斯學を修むる者の多くは醫師たりしこと之なり。蓋し醫家の專修科學たりし生理學、解剖學、組織學、病理學、心理學、人類學、比較動物學を基礎とし、之等諸科學の綜合的研究の成果として發達せるものなれば、世人の所謂ト筮易占方位などとは全くその類を異にするものなり。

孟子曰く「心正しければ則ち眸子明なり、心正しからざれば則ち眸子暗し」と。夫れ舜天下を保つや衆より撰びて皐陶を擧げ、湯の天下を治むるや伊尹を撰びて用ひたるが如き、皆觀相に依りて則ち不仁者を遠ざけたるものなり。儒家も所謂性善を第一として適所に適材を撰びたるものなるべし。

思ひ内にあれば色外に現はれて心相をなす。思ひ内にあらざるに色外にあらはるゝは之則ち神相なり。相者は内心を敬しみ、心頭に些かも邪意邪念を含むことなく、清淨潔白水鏡の如くなれば、天地の吉凶は自ら神の如く悉知するを得べし。又未發の吉凶は神相によらずして知り得べき術なし。未發の吉凶を察して豫斷せざれば相を見ること益なきに似たり。惣じて未發の象を察するに依りて人々各々願み禍を轉じて吉を得るものなればなり。

我が中祖は正德四年現在の地に卜居し、代々承繼し來たれる醫業を廢して專ら觀相に從ふことゝせり。爾來今日に至るまで子々孫々相繼いで斯學の完成に志し、祕傳奧義を傳へて研究に研究を重ぬること實に二百二十年の久しきに亙る。この間幾度か刊行されたる相書は、斯界の經典として今尙尊重せられつゝあるは余のひそかに誇りとするところなり。

余は家傳の祕書を基とし、父祖刻苦の成果を礎として和漢歐米の斯學を廣く研鑽し、之を實地に應用すること玆に三十有餘年、些か人を濟ひ世を益するの天務を果して父祖の靈に報ひ得たるは無上の欣幸とする所なり、

斯學は人生生存の上に幸福を與ふる修身濟家の指針なれば、其の要旨を席出し、大に之を發揮して、世の相學を學ばんとする同好の士に本意を覺らしむるは勿論、一般衆人と天與の幸慶を共に把掌せんとは余の年來の宿願たりし所、近來頓に衆望の切なるものあり、竟に意を決して玆に業餘の暇日此の稿を急ぎ、研鑽と實見とより得たる成果の一端を披瀝せるものにして、些かたりとも處世の指針、世路進退の座右に資する所あらば余の微意は

達せらるゝなり。然れども淺學元よりその全きを盡し得ざるも、願くば江湖諸賢卷を開きて斯學の階梯を歷、明理の堂室に昇りて精微の相理を窮め、幽玄の境に積善を樂しみ、その日常に活用せられんことを希ふ。

昭和乙亥晩秋

雲臺莊に於て

石龍子

本書を上梓するに當り畏友高橋靑想氏の勞に俟つこと筆紙に盡し難きものあり、且つ本書の出版を快諾下されし誠文堂主人の厚意、並に野口七之輔氏、竹村誠太郎氏の助力に對し特に誌して衷心感謝の意を表する次第である。

觀相學大意目次

第一　東洋に於ける觀相學の由來……一
第二　歐米に於ける觀相學の起源……二〇
第三　觀相法の要旨……二七
第四　觀相法は天才的直覺に非ず……三三
第五　術としての觀相法……三六
第六　顏面に就て……三九
一、顏面は感情と意力の表彰地……三九
二、大腦と顏面との關係……四一
三、內臟と顏面との關係……四二
四、婦人と男子との正格……四四
五、三停　○上停　○中停　○下停……四七

第七　顔面に依る人の心性と運命との觀測法……六八
第八　顔面は心性の鏡……六四
第九　顔面角度と才智の等級……六七
第十　顔面に於ける部位の例解……七一
一、額……七一
○額の大小　○額は智力の大小と强弱との表彰地　○高等感情と額
○例解
二、眉　毛……九〇
○眉毛と前頭葉　○眉毛と遺傳　○智力と感情　○眉毛と筋肉及び眼目との關係
三、眼……一〇八
○眼目と小腦及び大腦との關係　○觀察中樞と眼目　○瞳孔と虹彩と結膜　○眼に於ける形質　○人は眼に在り　○聲音なき眼目の自然的言語　○眼の說明
四、鼻……一二九
○鼻は人間性の表彰　○動物の鼻　○小兒の鼻及びその生育　○人種的觀察　○鼻と腦髓との關係　○形質と鼻及び鼻形の多樣なる理由　○鼻の變類　○鼻に於ける黑子紋理　○鼻は花なり其生涯に及ぼす關係
五、耳……一四八
○特殊發育に於ける耳　○小兒の耳　○耳と腦髓との關係　○耳の任務
六、口　唇……一五七
○口脣は生活機能と直接の關係を持つ　○腦髓と口脣との關係　○口脣の任務　○分集と性質　○口脣の分類　○雜例　○男子と婦人の比較
七、顎　骨……一七一
○顎骨は氣力の表彰　○腦髓と顎骨との關係　○顎骨の比較的研究　○自利的能力の表彰　○顎骨の區劃　○肉と骨　○顎骨の左右及び大小の說明
八、齒　牙……一八五
○齒牙と食物との關係　○齒牙の比較的研究　○腦髓と齒牙との關係　○性質と齒牙との關係　○兩親と子女と家庭
九、頰　部……一九一
○頰部の範圍と形狀　○頰部の後頭葉と顳顬葉との關係　○雜例

十、顴頰の表彰……二〇〇
○顴頰と智力　○顴頰と愛情　○顴頰と意思　○顴頰と健康　○顴頰と家庭及道徳　○顴頰と宗教心
十一、頤頰の彙類……二〇七
一、大きい顴頰　二、小さい顴頰　三、角張つた顴頰
四、興味を帶びた顴頰　五、長い顴頰　六、短かい顴頰
七、巾廣い顴頰　八、巾せまい顴頰　九、尖つた顴頰
十、後退せる顴頰　十一、突出せる顴頰　十二、中凹みの顴頰
十三、角張つて短かい顴頰　十四、角張つて先の凋い顴頰　十五、角張つて長い顴頰
十六、巾廣く短かい顴頰　十七、巾廣く凋い顴頰　十八、廣く角張つた顴頰
十九、凋くて短かい顴頰　二十、凋くて長い顴頰　二十一、突出て長い顴頰
二十二、突出して長い顴頰
十二、顴頰と運命……二二五
第十一　面部十宮の解……二二七
一、命宮　二、財帛宮　三、兄弟宮　四、田宅宮　五、男女宮　六、奴僕宮　七、妻妾宮　八、疾厄宮　九、遷移宮　十、官祿宮

第十二　顏面に於ける紋理……二三七
第十三　形貌の不足を辨ず……二四四
一、左右面　二、三停
第十四　難相……二五一
第十五　難相の起因……二五五
第十六　難相の彙類……二五六
○概形　○額の難相　○眉の難相　○眼の難相　○鼻の難相　○耳の難相　○口唇　○顴骨の難相
第十七　三形質と五行法……二二一
第十八　人の性運を計る關鍵……二二八
第十九　皮膚色……二三〇
○皮膚色の發生　○皮膚色汚濁の原因　○黑色及び赤色とその元素
○顏面各部位の皮膚色

第二十　手　指……二四五
○手指と心性　○手指の比較的研究　○手指の分類　○掌と指との比較
○掌紋　○手指は性運の表示　○手指の形狀と其意義　○手指と腦髓
○兩掌紋理の比較　○手指と健康　○四指と身體との關係
第二十一　觀相上參考とすべき種々相……二六〇
○歩行相　○座相　○聲音相　○笑相　○病相
第二十二　虹彩に依る諸病診斷法……二九一
一、虹彩診斷の原理……二九六
二、虹彩診斷の價値……二九六
第二十三　結　論……二九九

目次終

觀相學大意　上卷

觀相學大意

一　東洋觀相學の由來

昔、印度の淨飯王が摩耶夫人の姙娠に際して、或る日、五百人の相師を宮中に招いて胎兒を相させたところが、一人の老相師が恭しく進み出でゝ、佛陀の降誕を豫言したといふことである。これは既に佛陀降誕前に相學が相當に流行してゐた事實を語る有力な例證であるが、經文中でも法華經、金剛經には相法の深甚微妙なことを記述してゐるのである。

支那では古代の開祖黃帝の時代(堯舜時代、紀元二三〇〇年)に出た「靈樞經」の中に、外形に依つて內狀を測る法を說いてゐる。その中に五態と稱して、小陽人、大陽人、小陰人、

大陰人、陰陽和平の人と區別して、疾病と性質の關係をば詳細に述べてゐる。亦五形說と稱して、形態を五行に區別し、內臟の疾病や性情は形貌に表彰されてゐるものと解してゐる。その當時は、醫學と相學とは、未だ分離せず殆んど一體として流行したものである。而してそれが明瞭に分離されるに至つたのは、蓋し春秋時代の頃で、左傳國語等には觀相のみの記載があるのによつても明かである。

戰國時代（紀元四〇一年）に到つて有名な、姑布鄉、唐臯、鬼谷子があらはれ、その著書は相當の反響を見たといふ。荀子の「非相篇」は、この頃より好評を博せるものである。

秦漢（紀元前二四一年）以來、著しく相家が續出してゐる。而して三國時代に至り、吳の孫權の赤烏年間に發刊せる、「月波洞中經」を以て支那相書の嚆矢としてゐる。

後漢の王充の「骨相篇」、王符の「相列篇」等も亦著名な書である。

梁の武帝（我が繼體天皇時代）の世、達摩が遙か西天から來り、紫龍洞から相法の衣鉢を親しく傳授されたものが、卽ち「達摩相法秘訣」である。

唐代（我が人皇三十二代推古天皇の御代）になつて、有名な詩人、李太白の師事した、趙麗の「察色篇」は、今日の人々が讀んでも有益な參考になるものが多く含まれてゐる。五代（我が人皇六十二代村上天皇時代）の末つ頃、陳圖南が險岨な華山の石室に入り、白髮の仙人麻衣老師より千古秘密の奧義を授けられたのが、卽ち「神相全編」であるが、これはその後に明の袁柳莊が、神相全編を訂正增補し、これに自家獨特の研究を加筆發表し、こゝに始めて相學の系統立つた集大成を見たわけである。その後相踵いで現れた相法學者王文潔、石搭、白峰、虛虛子、高吾鄉等によつて一般に實行せられたのである。

さて我國に於て、古代に觀相學の行はれた例を見ると、遠く鈴鹿の老翁が、畏くも天武帝（人皇四十代）を相して皇祚を踐むことを豫言してゐます。次で藤原朝・奈良朝・平安朝より武家政治に至るまでの間にもこの種の記錄は決して乏しくないのである。

現今、我々の藏書に無くてはならぬ相書として、珍重さるゝ足利時代、應永年間（足利義政）、叡山の天山阿闍梨の傳へた「先天相法」は我が國第一の古相書である。また佛典中の